旅

藤田さんなど

伊東宗孝

○

一九五六年から七年にかけて、小一年私はフランスに居た。三十年ぶりの再遊だから、かなり大きな感激を期待して行ったのだが、風物が余りにも昔と同じなので、永い年月の距りが一気に縮まってしまって、一週間もするともう此前の生活の連続と同じことになり、何を見ても聞いてもピンと来ず其の点少々計算違いでがっかりだったが、さて又三、四年経ってみると無性にフランスの空が懐かしくなり、此間も、永い間同じホテルに居て、帰国も一しょだった田村泰次郎氏夫妻と、「近いうちに又も一度行きましょうや」と、しみじみ話し合ったことであった。

私はその小一年の半分はパリで過したが、あとの半分は二つに割って地方へ旅行した。画をかくためと、今一つは昔随分歩き廻ったフランスの田舎の良さを、も一度反芻してみたかったからである。

その旅の一つは南仏のヴァンス。丁度パスポートの滞在延期の必要もあったので、一気にイタリーのサン・レモ迄伸し、それからニースへ引返して、そこから車で一時間程北の山手のヴァンスへ行って根が生えてしまった。

南仏では田村夫妻と落合う約束だったが、スペイン旅行中の夫妻に出した手紙の行き違いから、私がサン・レモを発った翌日訪ねてくれ、ニースでは私

が泊っていることも知らずにそのホテルの玄関で今日の宿を二人で相談したなど、「君の名は」的のすれ違いでとう〳〵会えなかったのは残念だった。

ヴァンスは、マチスがロゼール礼拝堂の壁画をかいて一躍有名になった古い小さな町である。

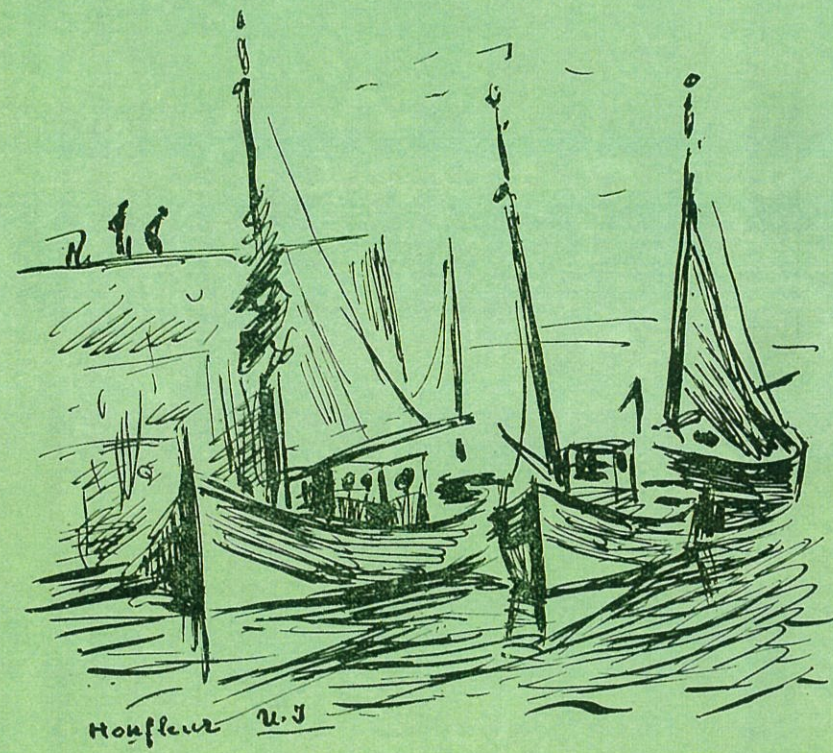
○

も一つの小旅行はノルマンディーのオンフロールへである。ノルマンディーへは此前の時、エトルタやアミアンへ何度も行ったことがあるので、も一度それを繰り返してみたかったからである。オンフロールはドーヴィルとル・アーヴルの中間の、古い小さな漁村だが、景色が非常にいいので観光地、写生地として知られている。

このノルマンディー行には一寸した挿話がある。パリでいろいろ調べて、さてオンフロールと決めたが、そこは汽車の幹線から離れていて、どうしても一度乗換えねばならない。画家の旅行は例によって七ツ道具が沢山で乗換えが憶劫だとこぼしていたら、藤田嗣治さんが、それなら僅かなことだから自動車で直行したまえ、僕も先年スペインからの帰途、自動車を乗り継いで帰ったが、ボルドーからパリ迄たしか二万フラン位だったと言い、長距離タクシーの溜りがマドレーヌ寺院の横にあることや、電話帳を繰って旅行専門の自動車会社を幾つか教えてくれ、なお、ホテルと特約の会社があるかも知れないから、一度それも調べてみた方がいいということだった。オンフロールはボルドーよりずっと近いし、それ位ならと帰って早速ホテルに相談してみた。

マスターは直ちに幾つかの会社へ電話をかけて値段の交渉をしてくれたが、ちゃんとした計算の基準があるらしく、どの会社も四万五千フラン前後という返事で、数年前の藤田さんの時とは大分違っている。私には、出来ればそういう快適な旅行をしてみたい気持も強くあったが、今と違って円とフランがパーの頃だし、それでは少し馬鹿々々しく思ったので、最後の電話交渉の後で、「私はマア最高三万位のつもりだ」と、ついつぶやいて自室へ引上げた。

すると間もなくフロントのホテル・ボーイの青年が私を追って来て「私は自動車をもっている。明後日からヴァカンスの休暇がとれるから、私の車でよかったら三万で行くがどうだ」という。実は最初は二万位のつもりであったにせよ、今三万と言ったば



かりなので観念し、それじゃ頼むと即決してしまった。が、考えてみると、数人の相乗りならとも角、たった一人の遠出は勿体ない話だし、片道三時間余で、どうせ車はパリへ日帰りするのだから、誰かを一日の見物に誘ってあげようと、とりあえず同宿の田村夫妻に話すとOKとある。

やがて当日の朝、いつも金ボタンの制服のボーイがリュウとした背広で迎えに来たので車のところへ行ってみると、意外にもボーイが「お母さんと妹の二人を便乗させてほしい」と、既に運転手席にかけさせている。彼のつもりでは、客はどうせ私一人だからよかろうと、心安だてに孝行に引っかけたらしい。私はそんなこととは知らず、二人きりよりはと田村夫妻をお誘いしたのだが、今さら六人では困るとも言いかね、渋々前三人、後三人で出かけた。何しろ田村氏があの大兵肥満だから身動きも出来ない。その上にいけなかったのは、私が田村氏を誘った気持の中には、この前の何度かのノルマンディー旅行で知っているフランスの田舎の、町や村や沃野の丘の美しさを見せてあげたいつもりが多分にあったのだが、案に相違して此の日の最短距離は、村や町を出来るだけ避けて作られた唯坦々たる直線道路を、時速九十から最高一二〇キロ位のスピードで突っ走るばかりで、窓外の眺めも実に平凡、何ともつまらぬドライヴでお気の毒だった。

やがてオンフロールに着いた。流石に素晴らしく小さな入江（旧港）の周囲は古い特色のあるノルマンディー建築と、色とりどりの漁船やヨットで、何処を截っても画になる好ましさであった。小憩の後私の落つく宿も決り、折角海岸迄来たのだからとムール貝や海老の新らしいのを食べて田村夫妻は帰途についた。今度は私が居ないのでゆっくりして貰えると思っていたら、ナント母親の方がもう後の席へ移っている。で、結局、帰りも田村夫妻には三人詰の不自由を続けて貰ってしまった。誘っただけのことがなくて相済まなかったが、其の後読んだ田村氏の小説に、チャンとこのオンフロールが昔の恋人と出会う舞台になっていたので、いくらか償いが出来たような気がした。

○

パリの藤田さんとは、藤田さんが日本を発つ時の特別な事情や後事を託された関係もあってそれ以来

特に親しくして居り、今度のパリ滞在中もつい小半丁のところにホテルをとって殆んど毎日のようにお会いしていた。二人共いくらか料理のたしなみのあるところから、よく二人で遠い市場迄タクシーで買出しに行き、特に藤田さんや私の誕生日(記憶していて下すったので大感激)のお祝いの時の豪勢な大饗宴は今でも忘れられない。その中の一度は田村夫人に助けて貰ったりした。

親切で、人懐こくて、いつも日本の上に思いを馳せているのだが存外そういうことが知られていないのは残念である。又、かなり間違って伝えられていることも多いので、発表して差支えないと思われる近況を幾つか書いてみよう。

先ず第一にパリの藤田さんは、名声も画業も、押しも押されもせぬ世界のフヂタに安住していられる。それはこれから書くことで十分想像して貰えると思うが、全く素晴らしいもので、ここ暫く日本人の一寸手の届くことではない。アトリエを倍に広げたのは私の居た頃に始まった。同形の隣のアトリエを買い取り、壁を打ち抜いて通路をつけ、新築同様の内部改造で、そこへいれるスペインの家具やゴティックのタピスリーなどの物色には何度もお伴した。私は大体あれで完備したと思って帰ったのだが、其の後手紙の度に大きなものを買込んでおられるので随分手狭になったことだろうと想像している。

自動車を二台買ったのも二年位前で、日常用のはプジョーの403八馬力、も一台は田舎と外国旅行用のドッヂ58年型三十三馬力の大型である。内外各地からの公式招待、各種レセプション、パーティー、映画やテレヴィへの出演など、手紙に見えただけでも大変な数であるが、二つの車が大いにお役に立っていることであろう。ベルギーのアカデミー・ロアイアルの会員になったのが二年程前、毎年クリスマスにはフランスの元大統領や元大臣や、ベルギーの皇帝などから贈物が来ているし、各種の審査員にも頻りに引張り出されている。藤田さんの人形(女の児)のコレクションは有名であるが最近は同種のものを自分で作ることに熱をあげているらしい。手紙でみると大変な凝りようである。

仕事の方の精進ももの凄い。昔の様な無茶な徹夜は慎しんでいるらしいが、昼間は寸刻も無駄にしないで、訪客と話しながらの作画も始終のことであ

る。家数で四五軒隣に住むビュッフェが、朝八時から夜の九時迄ブッ通しの制作で、一日平均一枚半と聞いて発奮し、私だって負けないと、年令差を超えての努力には、全く襟を正しくさせるものがある。伴の乙彰ももう四年半になるが訪問の度に良い刺戟を受けているらしい。

○

つい最近、もう此頃は嗣治が消えてレオナルド・フヂタに二通の御手紙を続けて頂いた。一通は、私が今度思いがけなくフランスから文化勲章のオフィシェ級章を贈られたことへの御祝いで、真実心のこもったものであった。それと、も一つの方とに張切った近況がいろいろ書かれてあるので御披露しよう。

例のカトリック関係から出る物凄い豪華本「黙示録」のさしえ、これはピカソやミロなどと世界から五人選ばれた中の一人としての分、目下三枚目を半皮の上に執筆中で、人物は三十人以上。これでやっと半分だという。目下開催中のパントル・デモアン・ア・ノ・ジュール展に六十号に裸女三人、十二月頃から始めた八十号の「キリスト降架の図」が人物十三人の群像。一月からの「キリスト誕生図」が同じく八十号で人物十人、動物四、今三枚目に着手しているという。これは注文でも売る為でもなく、少くとも十二枚位描き溜めて、自力で一つの教会を建て、イタリーのお寺のようにぎっしり画だけで壁を飾ってみたいという、遠大な志のものである。

此六月には、大改造で新装成ったペトリデス画廊で開店記念の大個展を開くことになって居り、四月一日にはローマ法王の招きでヴァチカンへ行き、法王に謁見後少し見物して帰るという。

これは大分前からの希望で、そのためもあって私の居た時も幾度か郊外の農村や住宅地を歩いたが、いよいよ今年こそは郊外に一軒家を持ちたく、多分最近に実現するだろうとある。そうなれば仕事の能率も一段と上ることだろう。

藤田さんは今年満七十四才。乙彰の手紙にも「益益お元気で、宗教画をかかれるようになってから作品も一段と輝きを増し」とある。最近のお手紙の結びに「訪客も少なく、散歩も外出もせず、女房には気の毒ですが、靴屋や宝石商みたいに机や自分の職場から離れられません」とある。謙虚な画人の心境というべきであろう。

(画家)